おやじはニーチェ　認知症の父と過ごした 436 日

父が何もできないのは認知症のせいなのか。母が先に逝き、夫婦で介護を引き受けて。『わけのわからない』父の言葉が哲学を通して理解できた」

婦人公論.jp 2023.3.19. 配信

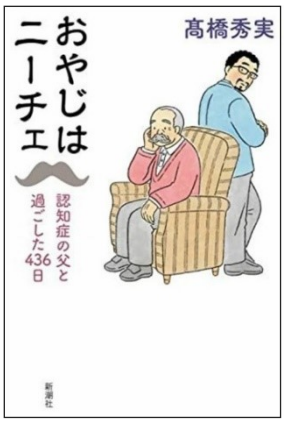
『ご先祖様はどちら様』で第 10 回小林秀雄賞を受賞、『「弱くても勝てます」開成高校野球部のセオリー』では第 23 回ミズノスポーツライター賞優秀賞を受賞し、主演・二宮和也でテレビドラマ化されるなど、話題作を世に送り出しているノンフィクション作家の高橋秀実さん。アルツハイマー型認知症と診断された父の介護を通して、高橋さんが感じたこととは――（構成:山田真理　撮影:本社・奥西義和）

＊＊＊＊＊＊＊

「父はアルツハイマー型認知症というよりも『家父長制型認知症』といえるのではないか。同時に、妻に頼り切りの自分も同じようなものじゃないかとも思いました」（撮影：本社・奥西義和）

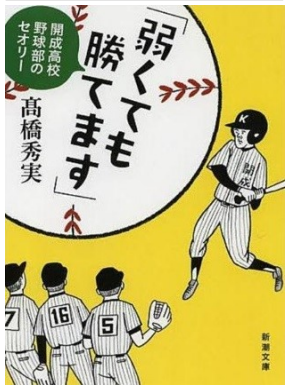
◆認知症のせいなのか?

父が亡くなって間もなく 3 年。 本書は、ノンフィクション作家である私が認知症の父と過ごした 436 日の記録です。ペンキ職人だった父は、70 歳で引退した頃から物忘れが増えていきました。 母に「病院で診てもらったら」と勧めたのですが、「大丈夫よ」と頑なに拒否されてしまって。 たぶん僕や弟に心配をかけたくないという思いと、「私がいるから大丈夫」という母なりの自負もあったのだと思います。 しかしそんな母が急性大動脈解離で倒れ、たった一晩で亡くなってしまった。 駆けつけた私たちが目の当たりにしたのは、認知症が進み、母の死もよくわからない 87 歳の父の姿でした。 そんな父を一人にしておくわけにもいかず、私と妻が、横浜の実家で同居することにしたのです。 父はその後アルツハイマー型認知症の診断を受け、要介護 3 と認定されましたが、私は父が「何もできない」のは果たして「認知症のせいなのか」と考えるようになりました。 というのも、アメリカの認知症の診断基準の「自立した生活が送れない」という項目を見て、「それって昔からじゃん」と思ったからです。



◆人は忘れるから生きていける

父は若い頃から外で働いて稼ぐだけで、生活のすべては母任せ。 掃除洗濯ができないのはもちろん、自分の服がどこにあるのかも、飲むべき薬もわからない。 食事は座って待っていればいい。 そうしたいわゆる家父長制における長年の生活習慣が「何もできない」状態を招いたとすれば、父はアルツハイマー型認知症というよりも「家父長制型認知症」といえるのではないか。 同時に、妻に頼り切りの自分も同じようなものじゃないかとも思いました。 認知症って一体何なんだ? と。 一方で、父が何度も同じ話を繰り返したり、一日中探し物をしたりするのにつきあわされ、自分の仕事に手をつけられなくなっていきました。 苛立ちのあまり声を荒らげては自己嫌悪することも。 そんな時、妻に「お父さんの言ったことをメモしてないの?」と聞かれたのです。 そうか、仕事で続けてきたインタビューのスタイルで接すれば、父と適度な距離が取れるかもしれない。 実際、ノートに向かうようになってから私の苛立ちは収まり、父も気楽に話せるようでした。 さらに書き留めた言葉を吟味するうちに、「わけのわからない」 父の言葉が、哲学の存在論や認識論を通して考えるとすんなり理解できることに気がつき、私はあらゆる哲学書を読み漁りました。 たとえばドイツの哲学者ニーチェの、すべてのものは永遠に繰り返すという「永遠回帰」の思想は、子ども時代の思い出話ばかり繰り返す父自身の宣言のようです。 また、ニーチェは、「忘れるということは、なんとよいことだろう」 とも言っています。 人は忘れるから生きていける。 認知症は、苦悩から解放された理想の境涯かもしれないのです。



◆父の言葉の意味を探って

そんなふうに何とか父を理解しようとした私ですが、いつの間にか父がどんな失敗をしても、「大丈夫、大丈夫」と母と同じように甘やかし、何もさせないようになっていました。 それに気づいたきっかけは、着替えを渋り、「大丈夫だよな?」と言う父に、妻が「大丈夫ではありません」と言い放ったこと。 その瞬間、父は急にどこかの回路がつながったようにシャキッとしたのです。 かく言う私も、「存在とか言ってる場合じゃないでしょ」という妻の一言で目が覚めました。 哲学で父のことが理解できても、夫婦の日常生活が破綻寸前という問題は解決しません。 そこで私たちは、24 時間の見守りと毎日の訪問を組み合わせた介護サービスを利用し、父に一人暮らしをしてもらうことにしたのです。 認知症になったら衰える一方だと思いこんでいたけれど、父は一人になることで電話での受け答えもしっかりするようになりました。 何より驚いたのは、母の記憶がよみがえったことでした。 その後、末期がんが見つかって父は亡くなりますが、私は入院中も父の言動を書き留め続けました。 そのメモをもとに、1 冊の本にまとめるのは、いつも以上に大変でしたね。「おやじのあの言葉はそういう意味じゃなかったかもしれない」という思いが繰り返し湧いてきて、いつまでも筆をおくことができなかったから。 今もどこか、納得がいかないんです。 おやじはニーチェ。 多分私は永遠に父について考え続けるのだと思います。

（構成=山田真理、撮影=前康輔）

書評

『おやじはニーチェ　認知症の父と過ごした 436 日』

橋本五郎（読売新聞特別編集委員） 2023.3.31. 配信

拝啓　高橋昭二様

あなたがお亡くなりになって3年余が過ぎました。 息子の秀実さんがあなたの介護の日々を 綴つづった本を出しました。深く感動したことをお伝えしたく、お手紙を認めました。 黄泉の国に旅立たれる時、無言で秀実さんの手をぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅぎゅぎゅっと握り返したそうですね。感謝をお伝えしたかったんでしょうね。

あなたは「認知症」と太鼓判？を押されました。でも秀実さんは医学による診断（断定）に根本的な疑問を持ちました。認知症とは「自立できない状態」といいます。でも父はもともと自立してませんでした。認知機能なく嘘を言っても「取り繕う」のは認知症であることの決め手とされています。しかし、認知しているからこそ取り繕うのではありませんか。

秀実さんはお父さんの日常を見て、一つ一つ反論しています。プラトンやアリストテレス、ニーチェ、サルトルなどの哲学を駆使して、お父さんにこそ人間存在の意味があると思うのです。秀実さんは横浜市から届いた高齢者実態調査に基づいて「孤独を感じていますか」と質問しました。あなたはこう答えました。

「お兄さん（秀実さん）みたいに学問があるから孤独なわけで、あたしのように学問がないと孤独も何もありません」。そう、孤独も学問の概念にすぎない。学問の鋳型に合わせて人間はわかるかと息子さんは怒っています。あなたは亡くなった奥さんをスーパーの前でじっと待っていました。そこを通りかかった秀実さんは思わず抱きしめ、すっかり冷えた背中をさすったそうです。覚えていますか。私は泣きました。

お父さん、秀実さんはあなたの姿にニーチェを見ました。サルトルだと思いました。そんな難しいことなんか、わしゃ知らんと言うでしょうが、私は思うのです。秀実さんのこの本は最高の親孝行です。どうかニタッと笑って素晴らしい息子だったと思ってください。